

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・二八二八

《今年の顔見世》

水口 一夫

當る寅歳の顔見世は、昨年同様に、コロナ対策として、三部制で行われる。第一部は、昭和・平成の名優坂田藤十郎の三回忌を追善しての公演。藤十郎は上方歌舞伎を代表する俳優で、今回上演の「曾根崎心中」のお初は、昭和28年初演以来、生涯で1400回を超える上演回数であった。その当り役を息子の扇雀、相手役の徳兵衛を鷹治郎が務める。

第二部の目玉は、片岡仁左衛門の「身替座禪」。今年78歳の仁左衛門が浮気がバレて、妻にとつちめられる大名を軽妙で上品に演じる。奥方玉の井に芝翫。

第三部は、松本幸四郎、片岡愛之助、人気俳優の顔合せ。「雁のたより」は、幸四郎主演のジャラジャラとした味の上方歌舞伎の喜劇。「蜘蛛絲梓弦」は愛之助五役早変わりの舞踊劇、舞台上に蜘蛛の糸が乱れ飛ぶ。今年も顔見世の幕が開く。

《遠藤周作が命名された「湖里庵」魚治さん》

私が初めて鮎鮓を戴いたのは昭和38年「すっぽんの大市さん」でした。たん熊祇園店熊庵の土田店長には毎度美味しい鮎鮓を戴き、そのご縁で土田さんの独立開店に支援を惜しみませんでした。

近江中庄浜の大丸百貨店保養所を平成11年譲受けてから毎月位海津魚治さんの鮎鮓を求めてきました。三年前の台風で鮎鮓宿湖里庵が倒壊、最近新築開店された店頭でお聞きして訪問しました。趣も新たに木の香り、遠藤周作直筆の「湖里庵」掛け軸、一枚硝子で見渡せる海津と港跡、景観は例えようの無い静寂、お料理は創意工夫に満ちた湖魚のハスや鯉、鮎、鱒、鮎などを優しく戴きました。比良山荘や徳山鮎とまた一味違った嵐山吉兆出の左寄謙佑さんのお料理でした。

《新しいホテルの所在地》常葉臺住職 今小路覚真

相変わらず京都市内に新規ホテルの開業が続いています。それぞれに趣向をこらし、国際観光都市のホテルを誇示しています。

しかし、その案内書を見て京都の生活者としてホテルの住所表記に違和感を憶えます。多くが京都市中京区〇〇町であったり、京都市下京区〇〇町で所在地が示されてあること、京都市内中心部の住所表示は通り名が基本で、東西南北の通りの交点が基点になり、それに上る、西入る、東入ると表示することで目的が達せられています。町名での表示は京都では馴染みがないのです。郵便番号の記入で郵便物は通り名は省略され、町名のみで届くようにはなりませんが、生活は番号で記されることに拒否感がありません。

住居表示一つにも、京都には京都の文化があるのです。新しいホテルも所在地は通り名で示してください。タクシー運転手も困っています。

宗教法人花鳥寺 土口哲光住職の説法

《功德の”オペラ”を奉納》

広島大学元学長の原田康夫氏は、耳鼻科の医師であるが、つとに有名なのは、現役のテノール歌手。「世界最高齢のオペラ歌手」を自認の満九十歳。

十月二十四日、京都東山の天皇家の菩提所、皇室の御寺・真言宗総本山泉涌寺に五十人と共に参拝。壮大な建物で堂内に釈迦の遺骨を小塔に納めた舍利殿においてオペラの「オー・ソレ・ミヨ」「グラナダ」など三曲を迫力にみちあふれた美声で奉納した。同じ医師であった最愛の妻ユキさんをその二十日前に亡くした。掛け替えのない命が、真実の幸せ極楽浄土に往生往きて生まれ代と成る。原田氏の胸にはユキさんの生前を偲び、悲しみを越えての追悼の「挽歌」ともいふご縁を得て共にした人々もそつと目頭を熱くした。

季節の家庭料理

田村真紀

《十二月 彩りミートローフ》 《四人分》

I(合挽肉三百グラム・パン粉と牛乳各大匙三を合わせたもの・卵一個・塩小匙半・胡椒、ナツメグ少々) 玉葱半個(みじん切り) うずら茹で卵十個 II(茹でたインゲン四本、赤パプリカ一個、プロセスチーズ、ベーコン各五十グラム) III(赤ワイン大匙三、ケチャップ・ウスターソース・ミートローフから出た肉汁各大匙二・バター小匙二) Iを粘りが出るまでよく混ぜ、玉葱を混ぜ合わせ四等分する。IIを一センチ角に切る。パウンド型にオーブンシートを敷き、I↓II↓I↓Iうずら↓I↓II↓Iの順に押さえながら詰める。二百度に温めたオーブンで三十分加熱し、竹串を刺して透明の肉汁が出たら焼き上がり。粗熱を取ってからカットする。IIIの材料を煮詰め、ソースを作る。

つれづれの記

山崎辰巳

《原点がえりの願望》

二十世紀終盤、バブル経済といわれ、実態の価値以上の評価が生じていた泡まみれの混乱に翻弄されながら必死に生き抜いてきた団塊世代も、今や喜寿と呼ばれる年齢を迎えようとしている。

その団塊世代の人から同窓会の話話を聞くことが急に増えた。多くは小学生時代の同窓会で、二、三年ごとの周期で催されたものがコロナ禍で中断され、今また会を開こうという気運が高まっているという。人間の繋がりがや絆は、血縁、地縁、学縁、社縁で結ばれるが、先に行けば行くほど親密の度合いは薄まる。生まれ育った地域の温もりの中で育まれ、培われた人間関係の原点は小学生時代かもしれない。記憶の残像も濃密そのものだ。混沌とした時代に向き合っている人は原点回帰を願っているのかもしれない。